対人不安に対するセルフモニタリング能力および賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の影響

0807043
中里　咲子

【目的】　対人不安を解明しようとする研究の中で，代表的なのが Leary と Schlenker(1982)の自己呈示理論によるものである。自己呈示とは，対人場面において，自己に対する他者の知覚(印象)をコントロールしようとする過程のことである。他者からの評価は，その評価者の自分に対する態度や行動に繋がることから，自己呈示は快適な対人関係を築くために重要な役割を担っているといえる。また，Leary ら(1982)は，(1)他者に特定の印象を与えたいと動機づけられていること(2)特定の印象を与えようとしてもそれが成功するかどうかに疑問があること，という 2 つの条件が揃った時に対人不安が生じるというメカニズムを見出した。これを受け，Leary(1983)は対人不安の生起を以下のようにモデル化した。SA=f[M × (1-p)]　なお，SA=Social Anxiety(対人不安の強さ)，M=特定の印象を与えようとする動機づけの強さ，p=望む印象を与えられる主観的確率を示している(f は定数である)。

本研究では，このモデルの M に自己呈示欲求，p にセルフモニタリング能力をそれぞれ当てはめて対人不安を解明していく。これと類似した研究は万代(2007)のものだけであるが，万代は状況別で対人不安を測定しているため，本研究では全般的な対人不安を扱うこととする。

p に当てはめたセルフモニタリングとは，対人場面で状況や他者の行動を観察し，自らの自己呈示がその場に適切か否かを考慮して，自己の行動を統制する傾向である(Snyder,1974)。これを受け，Lennox と Wolfe(1984)は概念を狭め，セルフモニタリングを能力として捉え，「他者の表出行動への敏感さ」と「自己呈示変容能力」の 2 側面からなると考えた。セルフモニタリング能力と対人不安との関連を調べた研究では，2 側面のうち他者の表出への敏感さよりも，自己呈示変容能力と対人不安との関連が強いことが示されており，自己呈示変容能力が高いほど対人不安が抑制される結果が得られている(諸井,1997 や万代,2007)。

また，M に当てはめた自己呈示欲求とは，自己呈示を方向づける欲求のことである(泉本・辻,1984)。小島ら(2003)は「賞賛獲得欲求」「拒否回避欲求」からなる自己呈示欲求尺度を作成した。先行研究では，拒否回避傾向が強いと対人不安も高まる一方，賞賛獲得傾向が強いと対人不安が低くなることが示されている(佐々木ら,2001 や清水,2007)。

本研究では，これらセルフモニタリング能力および自己呈示欲求のそれぞれが対人不安に及ぼす影響について，先行研究と一致するかの検討も併せて行う。

【方法】　大学生 132 名(男性 27 名,女性 105 名)を対象に質問紙調査を行った。使用尺度は(1)改訂版セルフモニタリング尺度(Lennox&Wolfe,1984)の日本語版(諸井,1997)，(2)自己呈示欲求尺度(小島ら,2003)，(3)相互作用不安尺度(Leary,1983)の日本語版(岡林ら,1991)を用いた。

【結果と考察】　まず，セルフモニタリング能力においては 2 下位尺度のうち，自己呈示変容能力のみが対人不安に負の影響を及ぼした。また，自己呈示欲求において，拒否回避欲求は正の影響を，賞賛獲得欲求は負の影響を対人不安に及ぼした。これらの結果は先行研究と一致している。

次に，Leary(1983)のモデルに当てはめ，自己呈示欲求の高低により，セルフモニタリング能力と対人不安との関連が異なるかを検討した。その結果，拒否回避欲求高群と賞賛獲得欲求低群において，セルフモニタリング能力の自己呈示変容能力が対人不安に負の影響を及ぼした。

以上から，(1)セルフモニタリング能力のうち対人不安と関連が強いのは自己呈示変容能力であること，(2)対人不安には拒否回避的な背景が存在すること，(3)自己呈示欲求のうち賞賛獲得欲求は対人不安を抑制すること，が示唆された。

(指導教員　豊村　和真　教授)